



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シルシとモノ : ニコラウス・クザーヌスのコンペンディウムにおける
Author(s)	野沢, 建彦
Citation	基督教学, 17, 25-27
Issue Date	1982-07-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46407
Type	journal article
File Information	17_25-27.pdf



シルシとモノ

— ニコラウス・クザニアスの

コンペンディウムにおける —

野 沢 建 彦

(1) 精神の視覚と(事物の)存在の仕方

クザニアスが『コンペンディウム』で意図したことは、存在の仕方の認識、すなわち、精神の視覚が「可能そのもの」を認識することである。しかし、このことは極めて困難である。なぜなら、あらゆる認識に先行している(事物の)存在の仕方には感覚も表象力も知性も到達しないからである。それゆえ、(事物の)存在の仕方には学知は存在しない。

では、この問題そのものは放棄されなければならないのか。クザニアスは、感覚の視覚は光が存在することを確実に見るが、光を認識しえない。だが光のシルシを知ることができるかと考える。この光との類比によって、クザニアスは、どんな認識によっても接近しえない存在の仕方に、精神の視覚はそのシルシにおいて関わることを

できる、と考える。

(2) シルシの認識

存在の仕方についての認識は不可能だとすると、クザニアスの現実の課題は、さまざまなシルシを介して(事物の)存在の仕方を認識することへと下降する。

シルシは二つの種類に大別される。感覚的なシルシと知性的なシルシである。感覚的なシルシは更に(a)自然的なシルシと(b)人為的な取り決めによるシルシおよび(c)それらから組み合わせられ合成されるシルシに分かれる。

自然的なシルシは「笑い」が喜びを表示する音声であるように、自然本性的に事物を表示する。人為的な取り決めによって表示するものは、言葉、文字、および聴覚あるいは視覚によって捕えられ、諸事物を人為的に決められた限りにおいて表示するところのものである。

可感的なシルシは次のような仕方で対象から感覚へと到達する。諸対象は自らのシルシを送る。シルシは空気という媒体を通して感覚器官に到り、感覚能力においてシルシづけられる。シルシは対象から生じる。この「対象の類似」と「知性能力の類似」(感覚的な靈魂)とから、例えば「見ること」が生じる。対象の類似は知性能力の

類似の道具である。知性能力の類似は対象の類似を媒介として感覚する、すなわち認識する。

(3) 推論的な認識形象

更に人間はよく推論し、やがて神を観る者となるために、感覚的なシルシから九個の認識形象を汲み取る。自然的な認識形象を組み合わせたり、引き離したりして、十の範疇、五つの普遍、四つの枢要徳といった知性的な技術的な認識形象を構成する。このように、感覚的なシルシから、人間は自らの本性に適した認識形象を汲み取る。

(4) 内的直観

人間は感覚的なシルシとそれから構成された推論的な認識形象を操作するだけではない。内的直観を有する。このような完全な人間をクザーヌスは宇宙学者と名づける。宇宙学者としての人間は今まで五感を通して世界の情報を集め、可感的な世界全体を記録し、よく秩序づけ、比例的に測って地図に記入し、シルシの世界を構築してきたが、彼はこの仕事を停止する。今度は逆に、五感の門を閉じ、万物の制作者であり、原因であるところのも

のに内的な直観を向ける。そして、彼は宇宙学者としての自分自身のうちに世界の創造主を見、似像のうちに真理を、シルシのうちに「シルシによって示されるもの」を精神によって観照する。すなわち、自分自身の中に、世界の建設者の第一のかなり近いシルシを発見する。この知性的なシルシは、万物の建設者の第一の最も完全なシルシであり、それゆえ、彼はできる限りあらゆる可感的なシルシどもから自分を引き離し、「可知的な、単純な、形相的なシルシどもへ向かう。」

(5) 光は闇の中で光る

精神の視覚は、どんな認識によっても接近しえない光の前まで行くが、光そのものに到達することはできない。なぜなら、知性は最高の能力であっても、シルシであるからである。永遠の光そのものは、可知的な、単純な形相的なシルシどもによっても近接しえない。「把握されない者(神)」、「存在の形相」は存在する限りのものどもによつては把握されない。光そのものは認識されえないが、光のシルシである「輝き」を見ることはできる。それは、「光が闇の中で光る」ように、知性的なシルシどもの中で光るからである。知性的なシルシは、光のシルシ

である「輝き」を受ける媒体である。しかし、知性は、シルシである限り闇でなければならない。

(6) 知性的なシルシの指示するもの

あらゆる認識能力の対象は相等性自体である。相等性とは、可能自体に所属するものである。したがって、人間の精神、知性は相等性のシルシといわれる。人間の精神は一な相等性自体の反照である。人間の精神は、一な相等性自体の知性認識する生きた現われである。《われわれの上にシルシづけられた》神の《顔の光》と予言者が呼んでいる認識は、人間の精神において、いわば最初に現われたのである。すなわち、人間の知性的なシルシは、その「輝き」を通して神を指示する。人間はこのような意味で、神の似像といわれるのである。

あらゆる認識能力の同じ「一なる対象」は「もろもろのシルシにおいて存在する限りでは」感覚の視覚の対象である。精神の視覚が変化しない多量化されえない全能な一性、一な数そのものを対象にするのに対し、感覚の視覚の対象は、一性の展開せる多性、一な数の展開せる多なる数を世界のうちに見る。諸事物はすべて諸事物の父なる光の反映である。

かくして、人間は二種の鏡を所有する。一な相等性そのものを映す知性的なシルシである鏡と、多なるものどもを映す感覚的なシルシである鏡とを所有する。この鏡は、共に、見えない光そのものの輝きを映し出す。